

〈特集〉 太平山をめぐる歴史と文化

野州俗伝 太平山文化圏のこと

永島 大輝

はじめに

本稿の目的は、栃木市の太平山周辺というローカルな地域の民俗を見ることである。具体的にはウナギの食物禁忌や、鶏の夜鳴きを忌むこと、鳥居に石を載せること、涼風祭と言ううちわを使う祭りのことなどについて述べる。そして実は、それは全国的な広がりがあることがある。全国的な広がりを知らずしてどうして栃木の文化などと言えようか。逆に全国的に似たような方の事例があってもそれが当該地域ではどのようなに伝えられているかというのを記していく。

たとえば、食文化にしても、小学館慣習百科シリーズ「ズジャポニカ学習帳」150字 漢字練習帳」シヨウ

ワノート（発行年不明、筆者が確認したのは平成後期）には、「武士によってぐう然、発見された納豆」というコラムがある。

納豆は、今から約千年前に日本の東北地方で戦をしていた武士によって、ぐう然発見されたといわれています。

当時は、馬にえさとしてゆでた大豆とわらをあたえていました。が、戦の最中で食べる物に困つたある武士が、馬のえさに入っている大豆を食べたところ、これが意外とおいしかったのです。戦場に運ぶとちゆうで、わらに付いていた納豆さんに大豆が自然に発こうし、納豆になつていたのだと考えられています。

【画像1ジャポニカ学習帳のコラム】



源義家たちが東北地方で戦っていたときのこと、腹が減った武士が、馬のえさに入っていた大豆を食べて、ぐう然、納豆を発見した。

とある。この話がある意味学習帳のコラムに載るほどの、「歴史」のようになっていたことは間違いない。検索すると Wikipedia をはじめいくつかの記事が見つかる。

ところが栃木県栃木市で伝承されてきた話には先の話と同じ馬の餌を食べると美味という食物由来譚で「しもつかれ（スミツカリ）」の次のような話がある。

スミツカリの由来

足利に住んでいた足利尊氏が、馬を世話するバテイが馬げ餌をあげているところをみた。ニンジンや大根だののくずを煮てくれたんだと。ある日、なにをくれてるんだと聞いて、一口食ってみた。ああ、こらうまいってんで、昔の下野の国なので、スミツカリとなった。一般の家庭に広まりつくるようになった。ⁱⁱ

「しもつかれ（スミツカリ）」は初午の食べ物である。話の中で材料が馬の餌であったということを考えると、現在その必然性が多少なりともあるのは納豆よりもこちらに軍配が上がると思うのだがどうだろうか。このように他地域の事例も引用しながらでないと感じないことが多い。今回は太平山神社の事例が中心であるが他地域の事例を引用しながら報告していく。

一 ウナギを食べないこと

太平山神社ではウナギを食べないという。太平山神社に神職として勤務するにあたって最初に、「ウナギを食べてはいけない」と言われるという話をお守りを買いつつ伺った。

ホームページにも次のようにある。

うなぎのはなし

太平山神社では、ウナギが太平山まで神様を乗せて来たという言い伝えがあります。

そのためウナギは神様をお乗せする神聖な生き物として、太平山神社では食べることを禁じられているほどです。

また昭和までは、太平山上の池まで多くのウナギが登ってきており、太平山に登るウナギは「うなぎのぼり」であるとして、信仰の対象でもありました。「うなぎのぼり」とは「地位・相場・運氣がみるみるうちに上がる」という意味で、一般的にもウナギはとても縁起の良い生き物でもあるのです。

江戸時代、太平山神社には徳川將軍家から多くのご神宝が奉納されましたが、その中にはうなぎを意匠にしたものが幾つかありました。

下のうなぎ御守は、そのご神宝の意匠を用いた御守です。

太平山神社に縁の深いウナギの御守が、皆様の運氣を守護し、諸願を結び良縁をもたらします。（引用に当たり改行などを変えた。）ⁱⁱⁱ

ウナギを禁食する例は虚空蔵菩薩や星の宮神社ではまみられることであり、本地域に限る事ではない。俗信辞典^{iv}でも「ウナギを禁食とする例は各地に見られる。ウナギを食べると目がつぶれる（栃木県上都賀郡）」^vといい、その理由には、ウナギは神の使いであるからという土地が多い。」とあり各地の例が引用されるが、栃木県の例をさらに書き抜くと「栃木県芳賀郡では、星野宮神社の乗馬はウナギであるから、ウナギを食べると盲目になるといって、物堅い家では食べなかったという」や「ウナギを食べると虚空蔵様の罰を受ける」などの記述がある。

日向野徳久編『日本の民話32 栃木の民話第一集』に「うなぎをたべない里」という話が載っている。野木の星の宮神社のウナギを食べないという話が載っており、その次に、栃木市の次のような話が載っている。

栃木町の人たちも、うなぎを食べませんでした。太平山に、星の宮の本地仏、虚空蔵菩薩がまつてあるからです。

徳川時代、栃木町へ引越してきた他国の人たちは、川にはたくさんうなぎがあるので、大喜びで、「こりゃあうまいものみつけた」

とばかり、うなぎをすくいあげ、食べてしまいました。ところが、神さまからではなく、まず隣り近所からてきめんにたたられました。

うなぎをとって食べたことがわかったと、町中の者がおしこんで来て、家財道具は道路へ放りだす、家主からは、

「たつたいま、出て行ってくれ」

と立ちのきを要求されるというさわぎです。

（中略）

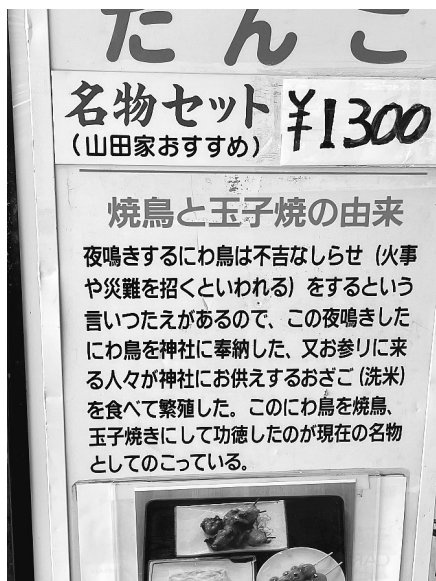
ところが元治元年というから、いまからおよそ百年ばかり前、水戸の天狗党が太平山にこもり町じゅう大さわぎとなりました。ところが、例の大きなうなぎがこのへんの川にはたくさんいるので喜んだのは、長い軍旅でろくなものも食べていなかった天狗党の面々です。武士の体面も何のその、川の中へはいって大いにとりました。

そして、「町の人々の予想に反して、天狗党の武士たちはますます元氣旺盛」だったために「ひとり食べ、ふたり食べ、とうとう大部分の人が食べるようになって、うなぎはあまりいなくなっていました。」と結ばれる。実際には読みやすく書き直されている民話のシリーズであるために、どこまでが実際に語られていた話であるかは判別しかねるところもあるのだが、太平山神社の周辺のウナギ食物禁忌の顛末の一つとして紹介しておく。

二 鶏夜鳴きの事

太平山では江戸自体の中頃から続く茶屋の山田家がある。
そこには次のような看板がある。

【画像2 山田家の看板】



「焼鳥と玉子焼の由来」として、夜鳴きした鶏が火事や災難を招くといわれ、神社に奉納したというのだ。近年、カドカワのムック本の記事にもなったので引用する。

栃木市民の身近な観光スポットである太平山。かつて麓の村々では、夜に鳴く鶏を不吉とし、山頂の太平山神社へ納める習わしがあった。神社ではそうした鶏を供え物の米で養い、参拝者に鶏の卵・肉で作った料理や、奉納米で作った団子をふるまったという。こうして玉子焼き・焼き鳥・団子は、いつしか太平山の三大名物と称されて、参道の茶屋でも味わえるようになったのだとか。

今も太平山には十軒ほどの茶屋があり、素材や味付けなど店ごとにこだわった三大名物を提供している。

たとえば一七〇〇年頃に創業した老舗・山田家の玉子焼き。地場産の魅力を伝える、とちぎ小江戸ブランドの卵を贅沢に使い、焦げ目のない絶妙な焼き加減と、控えめな甘みが特徴だ。すべて注文を受

けてから焼き上げ、一人前で卵三つ分とボリューム感もたっぷり。

もちろん、自家製タレが香ばしい焼き鳥や、もちろん食感が楽しい団子もおすすめ。栃木市を一望する山田家自慢のテラス席でゆっくりと味わいたい。^{vi}

鶏の宵鳴きを忌むことはたとえば、『大平町誌 民俗編』^{vii}にも記述がある。そこには処分の方法は書かれていなかったが、少なくとも宵鳴きの忌みは確認できる。同様の事例は栃木県だけではない。全国的に確認できるが、和歌山では昭和初期の報告が多く、「鶏の宵鳴きは災害の前兆であるという。牝鶏の鳴く時も同様忌む。」^{viii}とか「鶏の宵なきは不吉。」^{ix}だけでなく、さらに

鶏が宵鳴きすると不幸事ありとて忌む。牝鳥の晨するの忌む。以前は鶏を飼うも卵を食用とする時を告げしめるだけで、老鶏になると田辺では闘鶏神社側の大福院、稲成山の高山寺をはじめ神社、寺院の境内に放って天年を終えしめた。それらの鶏が

社殿、仏堂の床下などへ卵を生み知らぬ間に孵化したのもあったといい、又一部は野鶏のごとくなり樹枝を飛び遊ぶもあったという。自分が十歳前後（明治二十七年ごろ）までいくぶんこの風が残っており、大福院の付近で鶏の群れ遊ぶを見たが間もなくその事絶えた。^x

という詳しい記述がある。この中で、やはり夜に鳴く鶏を忌むことと、寺社仏閣へあずけることが書かれている。こうした俗信の背景には、鶏が境界を示す鳥であるからという考えがある。落城の際に鳴くのは、一つの区切りであるし、近年もそうした境界性から研究がある。^{xi}

つまり、本来は鶏が鳴けば朝なのである。そのため、朝でもない時刻に鳴くのはおかしい。つまりは凶事である、ということになるのだろうか。

三 鳥居に石を載せる事

私は栃木市（旧岩舟町静和）の和泉の天満宮で鳥居

に石を投げて載ると願いが叶う、と小学生か中学生の時に友人から聞いた。そのときはそんなものかと思っただし、どんな願いをしたものが分からない、勉強ができるように、とかそんなことかもしれないが、無人の神社で神社の信仰そのものの、たとえばどんな神様が祀られているなどとは関係ないようであった。

「下都賀郡誌 七」^{xii}によると「神社の鳥居に石を上げると学問が上達する」とあるから、やはり天満宮と関係しているのだろうか。太平山には「所願成就の一本燈籠」があり、看板には燈籠の火袋に小石を投げ入れると所願成就と書かれている。そして「鳥居や石灯籠にのせてある小石は落してはいけません。」と書いてある。このことから鳥居にも石を載せてよいように、ちなみに他の人の石を落とした場合についても次のように書いてある。

「落としてしまった時には必ずのせ返すことが約束事です。人の願い、人の幸せの邪魔をすると神様のお怒りに触れてしまうかもしれません。きをつけましょう」

【画像3】 所願成就の一本燈籠



四 涼風祭

次のような新聞記事がある。

「下野新聞」の2020年8月12日の「疫病払う
大きなうちわ 栃木太平山神社で涼風祭」【栃木】
平井町の太平山神社で9日、疫病退散や五穀豊穡な
どを祈願する「涼風祭」が行われた。参加者は大き

なうちわで風を起こし、新型コロナウイルス感染症
の終息を願った。

同神社は827年、淳和天皇が疫病退散などを願っ
たことをきっかけに建立された。天照大御神をはじ
めとした神々をまつる。祭りは毎年行われ、数百年
続いているという。

同神社敬神会青年部の会員ら約10人が「太平山神社
涼風祭」と書かれた縦約6¹/₂、横約2・4¹/₂の竹製
のうちわで社や参拝者をおおぎ、風を送った。祭り
の後、参拝者は紙に「コロナが収束しますように」「家
内安全」などと願い事を書き、うちわに貼った。う
ちは31日まで設置される。(文・写真 磯真奈美)

今回2022年も涼風祭は行われたようで、境内に
大きなうちわが置いてあった。

今回は、涼風祭にどのような歴史があるのか、など
は調べ切れていないが毎年行われ、団扇は毎年お焚き
上げされるという。

うちわに関する俗信として、常光徹^{xiii}は次のように述
べている。

団扇にはさまざまな機能があるが、あおいで風を起こすことから、災いや不浄を祓うという働きが顕著である。同八王子市の高尾山薬王院でも、元日から節分までの期間限定で「天狗うちわ」をだしている。一振りで魔を払い、二振りで福を呼ぶという縁起物である。以前は、夏場に団扇を腰に差している人をよく見かけた。涼風を得るのが目的だが、それだけでなく、身辺の小さな災いを祓うという役割も団扇にはあったのだろう。また、火を起こして火勢を得るために団扇で煽ぐように、煽ぐ行為には対象を勢いづけ活性化させる力がある。

とのことであり、今回の事例もそれに相当するものと考えることができよう。



【画像4 涼風祭で使われた団扇「無病息災」や「コロナ禍早くおわりますように」「彼氏ができますように」などと書かれた紙が貼られている。】

おわりに

以上、いくつかの太平山でみられる習俗をあげた。太平山という地域で変容した珍しい記録にはなったと思うが、中には全国的に分類しているものもあり、それがローカライズ化したということはいえる。

「戌の日に腹帯をまく」という習慣が全国的にあるが、現在では太平山神社でも戌の日に安産祈願が行われているように、もともと民間で行われていた習俗が、人々の需要から太平山神社にも取り込まれていったものは多い。私の家の節分の豆を入れるマスは太平山神社のものだし、大輝という名前も太平山神社でつけてもらった。いわゆる氏子がいる神社とは違うが、人々の生活やその中で生まれる「願い」に根差したものであることは間違いない。

雑多な記述になったが、それでしか記述できないこともあるはずだ。

民俗学では民間での信仰ばかりが言及されるが、プロの神職の方が独自に伝えている話も当然ある。最後に聞き書き調査の中で、小林一成宮司に伺った話を書き起こしておく。

調査は鈴木佑佳氏と2017年5月6日に行った。

「太平山には60年に一度の巳年にヘビが見つかるという話が言われており、その蛇は腐らない。見せることはできないが、その蛇が太平山神社に保管してある。蛇学者によればシロマダラヘビではないかとの説がある。ミイラとでもいうか腐らないものである。」とのことで、その蛇は現在見せることはできないとのことであつた。つまり、調査としては中途半端かもしれないが、この事例をどう扱うか考えた結果、そのままここに記し、後世に委ねることにした。現在の私は生物学的な蛇の種類に言及できるわけではないし、大切なのはそういう話を太平山神社が伝えていることである。

付記 お忙しい中ご協力いただいた、小林一成様、鈴木佑佳様、山田家の委ゆづり文様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

- i インターネットで検索するとすぐに「納豆がいつ、どこで生まれたのかについては定かではなく諸説あるそうだが、高屋さんが教えてくれたのは水戸に伝わる「源義家説」というもの。源義家が1083年の後三年の役の時、奥州（現在の東北地方の一部）に向かう途中、水戸市渡里町にある屋敷に泊まった折に、馬の飼料である煮豆の残りに稲ワラの菌が付着し、偶然に納豆ができた、という言い伝えだ。」という記事がみつかる。（THE ROOTS OF SHUN (May 2019) 偶然の発酵食「納豆」の名産地水戸」https://shun-gate.com/roots/roots_82/ 2022年10月10日閲覧）
- ii 永島大輝「栃木県下都賀郡岩舟町静和の世間話と民俗知識」『昔話伝説研究』34 2015年
- iii 「太平山神社」(<http://www.ohirasanjinja.rpr.jp/info/detail.php?n=0011> 2020年10月10日閲覧)
- iv 鈴木棠三『日本俗信辞典 動物編』KADOKAWA 2020年（初出は動・植物編として1982年）
- v 日向野徳久編『日本の民話32 栃木の民話第一集』未來社 1961年
- vi 村上健司「怪食巡礼」『怪々幽』6 KADOKAWA
- vii 2021年
大平町教育委員会編『大平町誌 民俗編』大平町 1982年
- viii 笠松彬雄「紀州有田民俗誌」『日本民俗誌大系4 近畿』角川書店 1975年（初出は1927年）
- ix 松本芳夫「熊野民俗記」『日本民俗誌大系4 近畿』角川書店 1975年（初出は1943年）
- x 雑賀貞次郎「牟婁口碑集」『日本民俗誌大系4 近畿』角川書店 1975年（初出は1927年）
- xi 小池淳「境界の鳥：ニワトリをめぐる信仰と民俗」『国文学研究資料館紀要 文学研究編』44 2018年や笹本正治『鳴動する中世 怪音と地鳴りの日本史』吉川弘文館 2020年（初出は2000年）
- xii 白田甚五郎監修・栃木県教育研究所編『下野の故事とわざ辞典』三弥井書店 1981年
- xiii 常光徹『日本俗信辞典 衣裳編』KADOKAWA 2021年